チ家12
164
1

利
317
1

明ケ 2
/104
巻 1

昭和文庫

昭和文庫

音也玉渕集序

物換星移(ものかわりほしうつり)幾度(いくど)秋月(あきつき)春風(はるかぜ)

[illegible]声(こえ)文(ふみ)成(なす)

[illegible]書文車(ふぐるま)[illegible]川[illegible]道(みち)が中

[illegible]山[illegible]先師時中(じちゅう)翁(おう)

庚妥(やまと)ゞ国(くに)伝(つたへ)[illegible]梓(あづさ)

明治四年五月廿一日購求

行ひ、傳写の誤を、つゝん
る我思へ、だに也ちなを八師の教と
交る人の外へ出さぐら書
ちりまゝし適ハ編ふよりを傳を
求ゝ足ら人懷よ源し聞人
口と写らゝ徒ふ托ちんゝを

悲む物ゝ多事深く
似し厚く震るよりを動きを
偽我傳へ実を失ふまく多し
思きハ人ふとちを我もすく
若ハ人よも拙ちを家し拙
ゝゝ傳ハ多し百張不傳

古聚書類（こきしゅうるい）の代々を
選（えら）ずして是（これ）真人乃本意（まことのもとい）
なるべしと

寛保三癸亥（みずのとい）皐月

今村義福序

音韻玉渕集題目録

巻之一

一五音大位之辨　二十目ウ
一漢字反切之事　七丁ウ
一文字之八ツ　十一ヲ
一ちゐ字より稱り極る事　十三ヲ
一濁字を呑て口いう系なく　十九ヲ
うゐゑをの事
一ゐ書ゑ呉音ハワの音を不ト　十一ウ
唱へる定格の事
一ちゐ字ゐうるゑを濁　十一ヲ
新濁也事
一唇舌齒牙之内の事　七丁ヲ
一引字之例　九丁ウ
一書仮の連声の事　十三ヲ
一濁字より稱り極る事　十六ヲ
一入声ハクの音よりかきく　十九ウ
けこへうゐゑをの事
一かきくけこ さしすせそ　十一ウ
たちつてと なにぬねの
濁音の事
一ちゐをゑ字ハ同分の事　十二ヲ
一ウユムの三門の事

一二字同名れう　十三ヲ
一がき、けこさ、すせそ
たちつてとはひふへほ濁る　十七ウ
一がきくけこの濁音れう　十七ウ
一をひふへほの濁音のり　十八ヲ
一うくすつぬふむゆるゐもり
うるあれ字の事　十九ヲ
一恵けせてねへめえれ恵うり
うるあれ字のり　二十ウ
軟濁のり　二十一ヲ
一ふしれのふしうれれり　二十一ウ
一てれ多えうるあれちのうれり　十二ヲ

一むうの字、文むのうれれり　十六ウ
一さ、すせそを足うてうれ
うるり　十七ウ
一おうよぬねの皇、暑くうり　十八ヲ
一ゐのうさたおはまやらわ、
うるれの字れ事　十九ヲ
一いき、ちうひみぬをいうり
うるあれ字のり　十九ウ
一をうれうれの変　二十ウ
一新濁軟濁のり　二十一ウ
一たちつてとうるあのれ
字のり　二十二ヲ

一洲の内ふふぬぬのうれれ
あのつれうれのり　十二ウ
一ふゆのうれれり　十二ヲ
一ひれうれのき　同
一ぬのうれれり　同ウ
一くるれうれの事　十二ヲ
ふりの石れ濁字のり　同
一きのうれれり　十五ウ
一たちつてとらるれる五音の事　十六ウ
一二行をりのり　十七ヲ
一引字を重ねるり　十七ヲ
一字濁て一同うれるり　十八ヲ

一されうれとと変れうら　十二ウ
一れとりれ字れり　十二ウ
一しのうれれり　十三ヲ
一るれうれの事　同ウ
一むのうれれり　十四ヲ
一ゐのうれれ事　同
一たたれ、二字のり　十五ヲ
一びぶべらのうれれり　十六ヲ
一三行ちりの事　十六ウ
一三行をる春字のり　十七ヲ
一一字重ねて一同うれのり　同ウ
一同一うれるらんり　十八ヲ

一聞てをふをハ代々のの事　ホ九ヲ
一をれの多代る事　ホ九ウ

巻之二

一百歳代孤角合の歌事

巻之三

一拍子の海根之代の事　三丁
一西ゝ拍子紀維の説　六丁ウ
一一説代海外十二調子律呂代　八丁ウ
一一説二機之変代る事　十二ウ
一機の論
一音声の事　十八ヲ
一壱代海　十九ウ
一変のつゝ代る事　ホウ
一時変る事　ホ二ヲ
一声代横竪の事　ホ三ヲ
一ひゞきの事　ホ三ウ
一ひゞきのの事　ホ四ウ
一品律のまうち代る事　ホ六ヲ
一拍子代る事　ホ七ヲ
一拍子のひのる事　ホ九ウ
一進退の五拍子代る事　ホ一ウ
一七ツ拍子の下　ホ二ヲ
一末の拍子代る事　同ウ
一代拍子のる事　同
一口忘代る事　ホ三ヲ
一心代亟処代る事　ホ七ウ
一序破急代る事　ホ七ヲ
一五段五段の琴代る事　ホ九ウ
一横竪代る事　ホ七ウ
一拍子切満出一拍子代る事　ホ一ヲ
一拍五拍子代る事　同ウ
一拍一拍子の下　ホ二ヲ
一代拍子代る事　同ウ
一合〻合〻一の下　同
一心の曲代る事　ホ五ヲ
一〻〻の位代る事　ホ七ヲ
一音階代る事　ホ八ヲ
一滑曲骨髓代る事　一丁ヲ
一五音代る事　七ヲ

一十徳の次第　十一ウ
一勝俗庭のこと　十五ヲ
一俗ワキの事　十五ウ
一ふりとひ毒こと　十六ウ
一毒こと言こと　十八ヲ
一皮肉のこと
一ふりよりず明也個よあ　十九ヲ
らんふりかこと
一心と切口と切或ハ不切若ハ　廿二ヲ
の事
一孤八こと　廿三ヲ
一皮肉と毒よ孤のこと　廿六ウ
一上中下の差別
一力石細石のこと
一吟味の毎
一たもの毎
一皮肉骨の事
一大小小大こと
一市一色さしこの毎
一沉んの曲の事
附　為山の賢人
毒近の賢人
後悪人なるこの
一不成敗平敗のこと
一毒と文字よ孤のこと　十五ヲ　同ウ　十六ヲ　同ウ　十八ヲ　十八ウ　十九ヲ　廿ウ　廿六ヲ　同ウ

一曲のおこりこと　廿六ウ
一色枝の曲の事　廿七ヲ
一台次のこと　廿八ヲ
一長と起と不正なる不若
無のこと　廿二ヲ
一分不の事　廿二ウ
一シテワキ日蓋たかおもり
て孤と更ものこの差別　廿六ヲ
一下の中の上の事　廿七ウ
一指しこの差別　同
一二字ぐりのこと　廿九ウ
一二字ぐりのこと　卅十ヲ
一次曲のこと　廿七ウ
一の角ぎりと下ぎりのこと　廿八ヲ
一台切の長短のこと　同ウ
一白まこきのこと　廿一ウ
一二調強化の事　廿二ヲ
一小ここのこと　廿五ヲ
一陰陽ものの湯のこと孤こと　廿七ヲ
一中書こと一ぎのこと　〃
成のこと
一ふるこ毒ものこの差別　同ウ
一ふるこのこの中孤こと　廿九ヲ
一ふりこのこと　卅十ヲ

一八ふのもの　四十ヲ
一ゆるふしの事　同ウ
一ゑまとゐくと下言よ物る　四十一ヲ
不ぬ物ゆ同ふしの物り

壹之丈

一義をふしのもの　二十ヲ
一のつるふしのもの　三ヲ
一ものるふしの事　四ウ
一ものる事ぬ丈　五ウ
一ものるまのもの　六ヲ
一ゆゑ同しのもの　七ウ
一ふり月の事　六ヲ
中まゆる事ぬる　七ウ
一ふりのもの　八ヲ
一二字ばかりの丈　同ウ
一二字ばかりのもの　四十一ヲ
一二字ばかりの丈　二ウ
一二字ばかりのもの　三ヲ
一ものす節の事　五ウ
一のむ事ぬ丈　六ヲ
一ものるまのもの　七ウ
一ゆゑ同しのもの　同ウ
一ふりけるくべの事　八ヲ
一三字ばかりの丈　八ウ
一三字ばかりの事　九ヲ
一序ぬ二字のもの　同ウ
一ひるふしるる　同ウ
一ものるふしの事　十ヲ
一文字ばかりの丈　同ウ
一ふる事ぬ事　十一ウ
一さげ丈事のもの　十二ヲ
一白字の事　十二ウ
一ものの成形のふなとをる
るるいかき事　十三ヲ
一イロのもの　十三ヲ
一ものの丈のもの　十四ウ
一三字ばかりの事　八ウ
一文字遣りの事　九ヲ
一拾ゆゑうて拾ぬる　同ウ
一ものるふしの事　十ヲ
一無してふしと言ぐる　同
一ふるとをとる事ぬ事のもの　十一ヲ
一おやしの事　十二ヲ
一曲とまする也て拍ぬ拍ぬ　十二ウ
樽ぬ曲と言色ふしのもの
一網ゑ辰巳ばかりふ網もの　十三ヲ
一次第の事　同ウ
一ものイ月ふく出るウキのもの　十四ウ

一ゑりのもの　十五ヲ
一ニテ一セイ出ハのもの　十六ヲ
一サしの末切よりかゝるのもの　十七ヲ
一フレは豆もの　十八ヲ
一同蓋の事　十九ヲ
一孔雀ふしの事　廿一ウ
一光のゆをてぬうちへ星て
うゝふる　廿三ヲ
一いのゑ廿日　廿三ウ
一ちりの事　廿五ヲ
一くせまりひの事　廿六ヲ
一中入の事　廿九ウ
一口中名案せりふ立てサしのもの　十五ウ
一下ゑのゑ案ゑるもの　十七ヲ
一小袖の序ハ二字のもの　十七ヲ
一呼りけて出るもの　十九ヲ
一初度の同吉ハ事　廿一ヲ
一詞ゑ経文漢和ゑ〻和歌集のもの　廿二ヲ
一のりとの事　廿三ウ
一ゑりハゑの同吉ハ事　同ウ
一ゑりハゑ　同
一サしゑ立て下ゑ立事　廿七ウ
一御義の事　廿八ウ
一ゑゝしゑハの事　廿九ウ

一扇の出ハ扇ゑ　廿ウ
一扇ゑ〻ぐづもゑ　廿一ヲ
一ゑゝゑゝきの事　廿二ヲ
一手上ハゆりのもの　同
一扇子ハゑりゑ示のもの　廿二ヲ
一扇ゑゑとへの条　廿四ヲ
一扇の出ハ扇ゑて手上の張ハゑ　廿一ヲ
一義のもの扇ツレの義扇ゑゑ〻ぐゝ　廿二ヲ
ゑ〻ぐゝ出ゑの事
一下ハ和ゑゑ　廿二ヲ
一キリの事　同ウ
一扇ゑ古の海　廿七ヲ

右同源の条ハ大概を書あゝ微細ゑ書るさハ筆紙
ゑるふゝゑゝ有

凡例

一玉渕集ハ冊墨付二百丁ハ先師時中翁庚寅ノ年記置
其後数丁ハ義福追加ス

一本書ノ源ヲ所々ニ尋ネ見ルニ或ハ改ムル所アリ或ハ
古文ノ如クニシテ是ヲ捜出シ或ハ新ニ見ル所ヲ穿鑿シ
書加ヘシ

一此五冊ニ書リシル事又ニザト書出シ作リ変ジ
数不足先師老人ノ習ヒ重ネテ作ル故
ひらゝ書ノつめ紙ヲ作リ祇抜折ト云フ義福述

音曲玉渕集一　用合音便巻

編集　時中翁庚寅
僻業　今村義福述

言語音聲ハ用合ニ用ノ外ハナシ用合ハ物ヲ
後ク上ニ物ノつと言後ハ用合ニ用ノ外ハナシ用合ハ物ヲ
呂ハ発用ヲ律呂則陽ハ陽ナリ万物ハ発育ヲ
すべて陽ノ為ハ不ナレハ言ハ獨陽ヲセハ
獨陽ハ物ヲ育ハ陽和合ノ為ニ生成
ヲ事ヲ得ル人ハ言語音聲ハ用合音節ア
ルヲ自然ノ妙用ヲ知ルヲ皆これ律呂ハ和合
ヨリ出ル事ナリ謠曲ハ長音ニ物ヲ言ヒ

付て例なきは先を添せんまは格あり用合れ
ぬらるに寄後乃うの例てかゝんよきはおくく
或は云葉かどきもて間を碍りかゝひ文字く
きり始くて用をまつ先物よなりこゝく
自己天成れ言音拙先へ例よあゝすや拙そなまと
又すてに寄曲となりて風ひ拙とまつ上ハ兼く
平日言語れ拙ひ乃をふてと聲れ文をなする
を叶ふ例所をかりあり学れたハまにまへ
故よ今思ひまつ趣をかゝく筆ゝ留む

逐一よ祇さは枝く挙へゝん三大要一に二に
れ例をかゝく准授に倚ゝ乃をなりこかく
文今乃うゝ寄ゝ和ゝに言語れ拙ひ鄙野なゝぬ
やうゝと常ゝ心を乎ひて天成乃冥合音便を
自得す新事かゝんゝ

寄連歌よ音連聲あり日のなり人
あきを新すんを有たゝん

五音五位横竪直音拗音次第

	一位 上上音	二位 中	三位 中上	四位 下中	五位 下	
宮	あ イヤウワ	い イイウヰ	う イユウウ	え イエウヱ	を イヨウオ	喉内 清
角	か キヤクワ	き キイクヰ	く キユクウ	け キエクヱ	こ キヨクオ	喉外 兼牙 濁
商	さ シヤスワ	し シイスヰ	す シユスウ	せ シエスヱ	そ シヨスオ	舌本 兼齒 濁
徵	た チヤツワ	ち チイツヰ	つ チユツウ	て チエツヱ	と チヨツオ	舌中 當齒 濁
徵	な ニヤヌワ	に ニイヌヰ	ぬ ニユヌウ	ね ニエヌヱ	の ニヨヌオ	舌末 兼鼻 清
羽	は ヒヤフワ	ひ ヒイフヰ	ふ ヒユフウ	へ ヒエフヱ	ほ ヒヨフオ	唇内 輕 濁
羽	ま ミヤムワ	み ミイムヰ	む ミユムウ	め ミエムヱ	も ミヨムオ	唇外 重 清

宮 や イヤユワ　い イイユヰ　ゆ イユユウ　え イエユヱ　よ イヨユオ　喉内 滿口 清

徵 ら リヤルワ　り リイルヰ　る リユルウ　れ リエルヱ　ろ リヨルオ　舌内 滿口 清

宮 わ ヰヤウワ　ゐ ヰイウヰ　う ヰユウウ　ゑ ヰエウヱ　を ヰヨウオ　唇内 喉 滿口 清

ゐ ヰヤウワ　ゐ ヰイウヰ　の類を拗音とゝ

竪ハ五音相通　横ハ同韻相通也

あ 横ノ一行爲五音之首稱之男声爲陽聲也

い う え を 横ノ四行皆稱女声爲合音陰声也

第二位生第四位第三位生第五位故二三爲能生四五爲所生

かきくけこ　牙声ト定ル支声ノ取發喉ヨリ出トイヘトモ

か ト成直チハオニ當ル故牙声トスル也

さしすせそ　歯声ト定ル支声ノ取。發ハ　さたちつ　同ク
舌内ナレ　さ　ト成直子ハ歯ニ當ル故也

あわや宮さこそ商なれか八角よたからハ徵よてはまハ羽そ
あ上音い八中なりやうを中上五ハトの中よをこそト音よ
以上中トハあかさたないきしちにひるふまは自と又通よ合ル
はまの水たからの火よそかハ木けつさこそ金よてあわや土ちも
ゆえハ又性よて音曲よ入ぬるなれも類にふれて記え

あハ諸字の根本なるハ五音五十字門横竪に居あの響き支
身体の理也さて物音ハ第二位を母ちてやいゆえよまた
第三を母ちてわゐうゑをを能生所生和合する事

元来自ら持つる字形ハ音ハ直音也先ハ第二第三を母と
して能生示生和合して生する所の音ハ物音也先第二
第三を母とすとハ五十字門の中ハ第二位の字第三ハ
字也其故ハ能生ハ母ハ第二第三ハ字所生のゆハ第一第
四第五の字也但第二第三ハ字ハ能生所生となる也先
あハ諸字の能生なれとあちいうを生しいるを
をしうりをを生ずあり又ハ文字あいうをを能
生して五十字門を出生する也其故ハ
第二ノ横行
かさたなはまやらわハあちまする故よあれを唱ふ

第二 きしちにひみいりゐハいより生ずる故に各始終に
いろくきなり

第三 くすつぬふむゆるうハうより生ずる故に各始終に
うのひくき有

第四 けせてねへめえれゑハゑより生ずる故に各始終に
ゑのひくき有

第五 こそとのほもよろをハをより生ずる故に各始終に
をのひくき有

如此初れあの字を根ざして あいうえをの五
字諸字ハ能もの母となり故に音末に各その
韻き有なり

あわやの三字ハ同韻ハ中にも別なる故に イ井 エ江
ヲオの音を学ぶもの也

又曰やわの二字ハいうハ二字より生ずる也其ゆへを
やと唱ふまはえたていを生ず其後口を開けは
ものつらやを成すなり

又わと唱ふまはえたてうを生ず其後口を開け

を[わ]を成そうなり是より[や]と[わ]とハ唱ふ
実初より[い]の[う]の音微細なる故に別して[や][い]
の所生の字とハ[う]乃所生の字とハ也
此[や]を能生して[いゆえよ]の四字を生し又
[わ]を能生して[わうゐを]乃四字を生すり也
如是横竪の能生を知定めて字母より
[き]を校すれと拗音の生所分明なり

あ[イ] い[イ] う[イ] え[イ] を[イ]

かクリ キクイ くクウ けクエ こクオ

さス しシ すス せセ そソ

たチ ちチ つチ てテ とト

なニ にニ ぬニ ねネ のノ

はフ ひヒ ふフ へヘ ほホ

まム みミ むム めメ もモ

やユイ いイ ゆユ えエ よヨ

らル りリ るル れレ ろロ

わウ ゐイ うウ ゑエ をヲ

各配当表[かきくけこ]の内そやさは第一の
[か]の字に第二を母とする時彼母乃音ハ[き]也
[ち]又[い]所生の[や]を呼かゑは[キヤ]と成
なり同く[か]ハ第三を母とする時母の音ハ[く]
也[ち]又[う]所生の[わ]を呼かゑは[クワ]と成
なり余前ノ如圖五十字門何成第二第三を
母とする[や][い][ゆ][え][よ][わ][ゐ][う][ゑ][を]是を同行の
字とする也

右の如く摸写は能生所生を配合すれば三門の拗音つゝれ一字は各三門の音出生(コエ)の部所有情開口發声よりのほゝ此音生ずる気なり上八佛神より下八名歟よりうまれて代音声を出す又有情のこゝろ風乃至木の舞を水乃石よりうゝたゝひ淑情の声迄もそれぞれ出生する也

文曰第二第三を同行れ母とする事第二あ喉第二い舌第三う唇也第四え歯ハ第五を唇也各第四第五の字を所生と成り又能生も成なりかくのごとくまに能生所生とをぬて色盡は相通ずる事也

一喉舌唇の三門の事

あいうえを　喉内
かきくけこ
やいゆえよ
さしすせそ　舌内
たちつてと
なにぬねの（ハなを舌内也）
らりるれろ
はひふへほ　唇内
まみむめも
わ

あかさたなはまやらわ　唇
いきしちにひみいりゐ　舌
うくすつぬふむゆるう　唇
えけせてねへめえれゑ　舌
をこそとのかもよろを　唇

援ト竪トノ喉舌唇ヲ考ヘテ唱フヘシ

一漢字反切かなづかひの事

輕重清濁依上字　平上去入依下字

上竪下横　横歸本　竪留末

上竪下横とは

○衣ノ字　於希切　いト反ル
呉音ニテハ於希切えト反ル

希ハ後ニ唱フ故ニ下也
ト横ト　ヨコニ見也

いきしちにひみいりゐ

ゐ　於希ハ前ニ唱フ故ニ上也
上竪トハタテニ見也

ゐ　於希ハ後ニ唱フ故ニ下也
ト横ト　ヨコニ見也

批生合反字ナル故カト反ル

又オケト呼テ反スモ於ハわゐうえおノたトえけせてねノけトえトなルし

批生合也字ナル故カト反ル

○生ノ字　所京切　せいト反ル
呉音ニテハ所京切しやうト反ル

あかさたはまやらわ
きくけこ
すせそ

批生合也ショハうノ拗音也
けいノイノ合テせいト反ル

又ショキヤウト呼テ反フ、しやうノ拗音ニ有キヤウノキヤハか拗音ニ有批生合さノ拗音ニテしゃ也則キヤウノうヲ合テきやうト反ル

輕重清濁依上字　平上去入依下字とゝのハたゝえ

○未ノ字　亡貴切　びト反ル

○訝ノ字　呼田切　げんト反ル

ぬりいみ　はぴにちしき　ぱふへか　此生合也　上ニ呼字亡ト濁ル故ビトニヨル下ニ呼字貴ノ一字カナ故ビト一字カナニ反ル

かきくけこ　此生合也　上ニ唱フ字呼トスム故ぴト清ニ唱フ字田トハネル故けニ合セテけんト反ル

せてねへめえれ

横歸本ニとゝのハたゝえは

○各ノ字　柯洛切　かくト反ル

あかさたなはまやらわ

前ニ呼字柯

横ハ本ニ歸スト前ニ呼字ノかニモドリテ又依下字ノ洛ノくヲ添テかくト反ル也

後ニ呼字洛也

右ハ引韻ノ字開合ノ分明ナラザル時玉篇ノ反切ヲ以為可知之記ス

竪留末ニとゝのハたゝえ

○福ノ字　方伏切　ふくト反ル

前ニ呼字方

はひふへか

後ニ呼字伏也

竪ハ留ル末ト後ニ呼字ノふくト反ル

○交ノ字　古爻切　かうト反ル

かきくけこ

前ニ呼字古

後ニ呼字爻也故ニかうト反ル

一引字の例

鶯 あふ 逢
邑 ふ 云
高 むふ 向
久 やきう 柳生
空 すふ 救
相 いそふ 誘
引 ちうと 留
數 ふ 吸
唐 あうふ 与
中 おちうと 落人
通 かつうハ 且
腦 かふ 叶
入 そふう 羽生
縫 ぬふ
天 ふ 醉
翁 ちうか 姫
教 ふ 今日
公 こふ 乞
蕉 みやふ 見
宗 そふ 添
鳥 いふ 出
登 ふ 向
繞 ぬふ
能 きの 昨日

方 いそふ 祝
彪 いうの 日向
風
猛 まふ 舞
表 うふ 植
奉 りうう 吹
陽 やうく 漸
遊 ゆう 夕
さむう 寒
とめふ 止
妙 いうこ 妹
蒙
郎 あらふ 洗
流 かさうと 猟人
王 くふ 狂
葉 こえふ 越
用 うふ 通
寮 えなま 離
朧 ろう 白

あかさたなはまやらわのまぢさるる引音八刑音芸
いつとも用く也右ふの外 京生丁平名令光

式たゝひ［ヤワ］まゝ所故ゝ同く也　又引音ゝ准ずる類

八乙女（サヲトメ）　やうゝあ　早乙女（サヲトメ）　さうゝあ　発（アヤウキ）　あやうき　俵田原（タワラ）　たゝら

毋上（ハハウヘ）　えゝうゝく　巌（イハホ）　いゝさう　箒（ハハキ）　えゝうき　如無延て唱ゝ

式類　あかさたな　たまやらわ　のかゝまゝ所故皆乙声（レニシヤウ）て同く也

△いきしちにひみいりゐ［ヰ］　ゆ［イユ］いゝ乙（ヨニコエ）　此引音ハ訓音（ヨミコエ）に

皆うゝ（ウ）皆うゝ刻て唱ゝ合音（スホム）也

△うくすつぬふむゆるう［ウ］　式引音刑音もゝ如皆うゝ

唱ゝ合音（スホム）也　但式内ゆうハ右ゝ如くイ。ウゝ刻ル

△えけせてねへめえれ［エ］　式引音訓音もゝ如皆ゝウ唱

［エウ］［イウ］［キウ］［セウ］［シウ］［テウ］［チウ］［ニウ］［ヒウ］［ミウ］［メウ］［リウ］［レウ］

此延かゝ如同前ニテ皆合（スホム）音也　全く刻字ニ非ス物ゝに

蟐　えゝてゝう（花）　をゝうく　又流（ル）ニ安（ヤス）てゝう乙（皆皆祖なゝう）　ゆゝう（未ル）

△をこそとのかもよろわ［ヲ］　式引音刑音もゝ如皆ゝウ

唱ゝ合音（スホム）也　又引音ゝ准ずる類ひかゝを唱ゝ

扣（大仰多恐）　氷（融）ゝる　粧（ゝ）ゝ　火々出見

同（ルクテを）　後宇多院（ゴウダヰヨト延ル）　おゝうだのゝ　仏（ホトケ）　ぎゝう

乙（レニ）　皆のたゝひ皆乙声（レニシヤウ）て　合音（スホム）也　此外多乙

一　文字ゝうゝ刻て　口あゝ入（ル）

以をしの字を延生字を捨て次の字へそくらり生
へしこそ也故に短く成て二川乃かな一字まで延乃
そりかりて八なり年竟毋字をぬく呼の点に生
毋字短し此部分有て或は生字下て延
く出して延不も有又上下の章めちらしそうり
やうもちろへ　又篠まて八所よりてうはまは徒
白居易不もそ　二見せそやと思ひ　（系ちやこ思ひ）

あかさたなはまやらわ　此假名八あのひぐきより あ、移し
三　長谷の川さの　千　今八あ川さう
北　たすうあ者八　江　越安乃ふちかのそひ

いきしちにひみいりゐ　此假名八いの引きより い、移し

うくすつぬふむゆるう　此假名八う八響より う、移し
白　花よなくうくひす　拍　今かくうきめ
胡　人を待ぬうきを　京　徒よりうあめや

えけせてねへめえれゑ　此假名八ゑの引きより ゑ、移し
伊　仮世後を　れ　内たてえは
う　洞も夏なとめえぬ　や　世中八ゆみえて

松　沖よりいさ花いさり
千　かなて山ふまうは
暁　忍意いて
楊　いそ初めいそ
色　花もちりいちるしる
実　袖ぬにいみへへ
拍　今かくうきめ
京　徒よりうあめや
れ　内たてえは
や　世中八ゆみえて

をことのほかよろこ世低名人なの勿音より「を」後に

花 元一ゑこゝをあわひ　　ゑ　ゐてをひゝて

反 ものおもうけハ　　彩 あゝむへしもおもひ

仏 を城秋風乃　　俊 多をもてゐを

二字と上のうつり

ゑ 宋ハ行こゝをを一向き　　を　からゐをきゝへく

格 安孤こゝひゝ人を　　粉 ゐるくゐをゝ

れ 清俊ハ行をを世せ　　卒 らをうゝ世ゐゐ世うて

三 をを月も時よゝ家ゐをゐよを後ゝ

一音便の連聲乃変　　愛宕筆を記ゝ可受口傳

百人一首　　三人一所　　三界一心

陽成院　　冷泉院　　せめて今ハまゝ

下ゐハゐり　　嘉もたゝ

一をゐ字よりうつりやうゝ事

訓の時を先よ淮して唱へ

○あ　いう　ゑを

な　にぬ　ねの唱

二五

但をゐ字を浄くをゐれを
をゐつと音伝叶

二五

恩愛 嗔恚

寒雲 輪廻 観音 本音

○わ ぬ う ゐ を

か に ぬ ね の ト唱

はもわト後所ニテハなト唱

淳和 村邑

関羽 尊詠 感應

金盌銀盌

○や い ゆ え よ

ニヤ ニイ ニユ ニエ ニヨト唱フ

深夜 散位 人油 変妖 神輿

陰陽 門院 泉涌寺 萬葉 貪欲

圓融 春遊 右同

乞ハニ三ウトハ不唱ゆうゑいうト刻ユヘクの字ノウクリニテよゑうト唱フ

○ほ ひ ふ へ か

三幷 玄賓 寒風 源平 遠浦

ま湯よ男ノ唇を急ト合セてえづむ

魂魄（コンパク）　先非（センヒ）　絹布（ケンプ）　君辺（クンヘン）　尖峯（センホウ）

但音曲流ゝよりまぬ間に唱へざる不ものゝ世類なり

かつゝのはゝ（カツツノハハ）　はゝ母（ハハ）　はゝ遠ゝ（ハハトホ〻）

びんぼけ（ビンボウ）　はゝぶり（ハハブリ）　はゝぞゝ（ハハゾゾ）

念心不乱（ネンシンフラン）　一会発起（イチエハツキ）　一万八千（イチマンハツセン）

○さ　ー　すせそう

ゝの活間も舌をひろへてゝぬへ　ー

ゝくゝぬれた下れ歯音へ重く発也

満参（マンサン）　親子（シンシ）　涌水（カンスイ）　安全（アンセン）　親疎（シンソ）

身三（シンサン）　錦繡（キンシウ）　年数（ネンスウ）　耳泉（カンセン）　玄宗（ゲンソウ）

○ざ　じ　ずぜぞう

右清音ノ所ニ記ス如舌先ノハゞキニ

ゝぬやうゝ唱へ　ー

金山（キンザン）　変成（ヘンジヤウ）　神水（ジンスイ）　神前（シンゼン）　先祖（センゾ）

源三位（ゲンザンミ）　源氏（ゲンジ）　三寸（サンズン）　現世（ゲンゼ）　眷属（ケンゾク）

げんじの唱へゝ字ゝ字ゝ舌をひろへさせんゝあゝ傍ゝイ文字

を付ゝを直ゝげいじとよむことイヤ　又眷属ヲ人ゝ

ぞくゝト書モけヲ　拗音ゝそ　クエと唱ふ時ハゝゝゝゝヲ

つゝゝ記ゝゝ故ぞゝ　ゝゝ舌ゝゝず　又目録地名傍ニ

ンゝヲ付ゝハいゝゝゝゝ字ゝようゝまぞ　じゝかゝニ為安

き故ゝ舌を齧へゝ間ゝ　ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ心ゝ

唱ゝへきゝのをゝへゝゝを主につゝんぢトヨムもイヤ、ゝれ

皆音便を不得心故先

○たちつてと　たゝ字を清くたぬれん音仮叶

耶鄭（カタタ）　船中（センチウ）　金鎚（キンツイ）　心底（シンテイ）　仙徳（セントク）

進退（シンタイ）　天地（テンチ）　感通（カンツウ）　先帝（センテイ）　玄冬（ケントウ）

○だぢづでど　たゝ字を濁くたぬれん音仮叶

梅檀（ヒダン）　天竺（テンヂク）　神通（シンツウ）　南殿（ナンデン）　槃特（ハンドク）

禁断（キンダン）　班女（ハンヂヨ）　三途（サンヅ）　怨敵（ヨンテキ）　震動（シンドウ）

○らりるれろ　らゝをふくたぬれん音仮叶

安樂（アンラク）　禁裡（キンリ）　感涙（カンルイ）　衰龍（コンレウ）　参籠（サンロウ）

散乱（サンラン）　千林（センリン）　遠流（ヨンル）　秦嶺（シンレイ）　嶮路（ケンロ）

一連の字よりうつるやうれん変　凡てつゝ字をキツトつもれんものつゝ音仮叶

○あいうえを　たちつてと　ト唱フ

月庵（ケツタン）　佛意（フツイ）　悉有（シツウ）　法縁（ホウテン）　佛恩（フツオン）本音

叱唖（シツタ）　厭陰（ケツイン）　遏雲（アツウン）　支祇（ケウテキ）　八億（ハツトク）

一握（イッチヤク）

○わ　是モたゞ通ス

哲王（テツワウ）　屈惑（クツワク）

○やいゆえよ

チヤ　チ　チユ　チエ　チヨー唱フ

不世尊者（ホツセヤソンジヤ）　八音（ハツイン）

出涌（シユツユ）　佛縁（フツエン）　物欲（モツヨク）

ヤ　ユ　ヨク　ヤ音

塔頭（タツヅ）　毛ハタウトワメテ、ウツリ濁音ハ音便ダガ故チユトイフシ引テ唱フ

蓑笠翁（サリツヨウ）

はモワトヨム所ニテハたト唱フ

今日者（コンニチハ）

摂陽郡談（セツヤウグンダン）　納音（ナツイン）

○はひふへほ

潔白（ケツハク）　法被（ハツピ）

鉄鉢（テツハツ）　達筆（タツピツ）

供遊（クユウ）　ゆハいよ色ス故ツメテノウツリチウト刻

節用集（セツヨウシフ）

ま濁よ唱ふ唇ニ合セてくづむこと

實否（ジツフ）　一瓶（イツペイ）　合浦（カツホ）

末伏（マツフク）　秩邊（チツヘン）　末法（マツホウ）

○らりるれろ

古を巻て唱ふ

娑竭羅（シヤカラ）　出離（シユツリ）

沒落（ボツラク）　悉令滅（シツリヤウメツ）

別涙（ベツルイ）　滅裂（メツレツ）　摂録（セツロク）

雑類（ザツルイ）　別例（ベツレイ）　實録（ジツロク）

○かへ　きくけこへ移ノかハツメテうつる

悉皆　悦喜　拔群　摂家　羯鼓
發向　一休　八苦　吉凶　葛根

○さーすせそう　右同

佛参　一子　拂子　出世　一足
鉄札　合掌　一驚　雪山　早速

○たちつてと　右同

接待　甲冑　密通　雑躰　出頭
薩埵　雪中　鉄鎚　越鳥　必得

○がぎぐげご　濁へ移ル　ハ上のツメ字を呑ム

渇仰　別行　發願　雪月　密言
乞丐　剛疑　逸群　達藝　實語

○ざじずぜぞ　濁　右同ノム

佛像　密事　骨髓　忽然　血族

末座　鉄城　吉瑞　佛前　脫栗

○だぢづでど　濁

悉達　出陳　筆圖　別殿　越度

末代　変定　列廚子　密傳　熱毒

○なにぬねの　右同ノム

刹那　出入　發怒　越年　寶能

八難　脅肉　黠奴　失念　薛能

○ばびぶべがぶ　濁

血判　佛平等　願文　執鞭　右同ノム

佛罰　熱病　節分　結襪生　伐木　發菩提

○まみむめもも　右同ノム

末々　佛名　別夢　發明　悅目

別幕　逸民　即滅無量　必滅　見佛聞法

一ツメ字を呑てあいうえをとへ移るハまゝの心なり

○あいうえおを

—— —— —— —— —— ——

あいうえおを［ちにぬねのトのるを］ほ

もへとちりぬるを

寶悪　生滅色　滋雲　高宮へ　会稽山

一入声の［ク］の音より［かきくけこ］の字をへうつるハ［ク］音をはねて終る

欲界　讀經　悪口　北溪　六根　本音

行竿　悪鬼　白駒　肉桂　白黒

同濁字へうつる

落雁　木魚　國郡　六藝　覺悟

國号　六義　六具　剋限　悪業

同はひふへほへうつるハ清濁ともよんで［ク］音より終ること

そえ［ク］音をツメテうつる時も有

若輩　囮筆　白布　國兵　白峯

北邙　憶病　作文　各別　國母

北方　六臂　獨夫　百遍　獨歩

一歌書并呉音ハ[ツ]の音ヲちト唱ル定格也

一吉質秩　日筆律越闕結切節

熱別帥　褐達　八鉢塙七

也一て[ツ]の音ゐ字ハ一字ともに二字ともにあて唱

或ハのとてうり又ハちト唱へ名とく直ち唱へ

音うり訓の文字へ移かも同前也

浯れ数をつく　生月鈍に　一鉢を

日月を　唐突ゐ　少減ゐ　越の国ト

一がぎぐげご　ざじずぜぞ

だぢづでど　ばびぶべぼ

右何」モ濁ト成時ハ鼻を兼ル取分がぎぐげごノ濁ル

ハ鼻を主ゆゆへ濁ヘ移かハ鼻へ呑ミ結ヘうつかた

ツメテ移かなり

なにぬねの　まみむめも

「らりるれろ　ばびぶべぼ　世濁音ト

だぢづでど　世濁音ト

右[な][ら][ま]の三行ヲ鼻へ呑モ濁ヘ同前故なり

一ゐ字うり移ろるなら濁新濁もを呑ヘるかりハ不濁也

一訓の「つ」文字ハ直ち呼ふ又ツムルハ有吾て殺ふハた
まくらを也

○まつ（松侍）　義経（ヨシツネ）　縄正（ナワシヤ）
朽（クチル）　初吉（ハツキ）　三四（ミツヨツ）
○謹（ツツシンデ）　別（アカツキ）　討立（ウツタチ）
祈（ウツタヘ）　寄（ツヒ）て　死（シニ）て
○山猿（ヤマサル）　初月（ハツツキ）　千満殿（センミツトノ）　木津川（コツカハ）　成（ナリ）て　かやうのたゝひハツムル
　　　

生涙等をしノ濁音に唱へて未詳なれども又ひなり

ぢう 從　ぢん 仁　ぢう 上　ぜう 尉　ぢよ 叙

ぢう 住　ぢん 塵　ぢう 定　でう 牒　ぢよ 女

ぢゅ 佛　ぢや 邪　ぢく 若　ぢよく 辱　ぢゅん 潤

ぢゅ 鰻頭　ぢや 薄茶　ぢく 執著　ぢよく 濁　ぢゅん 純

一ぢづ　此二行の仮名ハ唱へいの仮名よりうつる時ハ〻文字を書

築地（ツイヂ）　内陣（ナイヂン）　平治（ヘイヂ）　桐槌（アヒヅチ）

系圖（ケイヅ）　海津（カイヅ）

一ウ喉　一舌　ム唇　の三行此事ハ喉舌唇の分ち有

こいへとも三字とも亜音なり頭字よりうつして唱

ふ事を亜に唱ふハ未詳の訳なり

うゑ 嫐　うば 奪　むべ 宜　むま 馬

むめ 梅　むゐ 井　うま 生

生　うむハ 直ニ唱ハヌル　むまるハ 埋　うづむハ 直ニ唱ハヌル　むもるハ 埋

一二字用合の変いろは擬乃やうよ擬ふよりて書

一字假名にもく成安きあり吾よ弐ゑあり吾之
就ひ行中よ其もくなりてのひ之又短くもゝ之名ろ
を見ゝ見假名たりひの定紙を知る故なりそれ
少へ上の假名ゝ如きよつまて次の假名或は皇へぬけ
或はちいさ紀字大きよあり異きかゆのもくく示そハ
吾定南り多ゝ文字隣之者一皆口内ゝ定紙な
き故其ゑりよなりちもゝ又假名扱ひのことよきう
心を付て口中を考ろやうよすれを考ゝ出来て推の
ゆゝと考よあり年竟第ゝ文字ゝ間合ゑあろひに

工夫を用ひさ教ゆハ急に行南まて出ゆゝ為ゆあり奢
あろひ和ろとをり心ゆて八又行たゝぬ示もあり又
食きを考ろまて間ゆゝハ添音曲ゝ行やゝ考よ
なり彩角為ゝく能生所生ゝ響紀ろりを熟遊
紙間ゝ使ひ考ゝて耳ゝたゝぬやうよ猶ゝ考ゝ出ろ
音便の假行なる案

第一位
一あかさたなはまやらわ

考ハ陽声ゝ同音ゆ故ゝ口中開き点ゝ音声
出ゝて文字ゝうきゝ上り我ハもくゆ或ハ大きゝよあり

安く後く内よりたるむ字なり喉内をたゝれずゆ
ゑむりゆゑ口をすゝて舌舌内を呼ふ事は音位の質
きて発ー

○ゆくまをさらふ雲のみかくれみかくれハやまゝけの
もうハや

かやうなゆやうなる発

○芭「あれぬるあ文ハものゝ事

口を開ける故かもゆかもとハ
ふ発

第二位
一いきーちにひみいいりゐ

此字能生の文字故相きゝ字也必相色て音の上をゝれ
安ー仗実を入ル心有ハ

是ハ成まゝ底と考ハ新ハ

第三位
一うくすつぬふむゆるう

此字も能生の文字故相ー但第二位とハゆゑり有
辰に公を付すゞむハ

第四位
一ゑけせてねへめえれ発

此字ハ不生の位名也舌のたゝ其て平く少き如安き
字ありそれ故強くあるらしてハ基ハやしくゆゆ和
うに相く舌扱ひすハ

○千くもゝ義まゝやたけ記れ其いゝ事ハ雲乃うべ
うけてとちゝぬ分乃ゆく発

○ 【え】の仮名を え と拘音を唱ふる事 毛ホウ 衣のかゞり そきらすゝ

すえ　うへ　さへ　えもく

○ 【け】の仮名を け と拘音を唱ふる事

すけろ　うけ怪ふ　生ける

第五位

一をこうとのほもよろわ

氏字も不生の文字也但第四位なれ共りきちいきく

して立記仮名也我は先ゆろとあれ共口開角き

音仮なをぶ唇をすゞめ唇まで唱へちいきく拍きゝ

ゝ可也白切などに拍まで我むへし但【と】の字ハ猶

公得有へし別ま記ス

○ よ　それもおなしせのいろちろをきりもと

○ たもかくをかすふろ孫もうたもを

○ まこ角ふよ

やうの不大きなるてハ忘まりかくゆ

きゝくく拍なり

又曰引字の用く字のてきなる時ハ大きな拍安きも

○ たまゝねハ山行ゝ

諸行無常と

生をうるに

老いて殺うふよ

○ 【をた】の仮名 ウヲ と拍音を唱ふる事

お低く　　拍きゝ　　ちゆり

きやう　　けうを
きのふ　　せうきやうの夜雨　きやう書たう
かやうの引音も ウラ と呼ふる大非也
○よの仮名を イヨ と物音よ呼ふも悪
きよう　　まうよひ　　とよのひかり
一ンと字ハえ来むの字まて ウンム 亟用なり
他と字ハ舌内すて えふ拍し 鼠の内も必
との字より引つき ン のかゆ消し わ巳スふ
下まて拍ふ多し 毛拍き 徒接也 能し 仏と

付て徳ふへし

一かきくけこ　　氏三行巳く 行南巳たづこて 老
さしすせそ　　やすき仮名なり
たちつてと
○タハうれくさとちそふみ川 ある花こそ 多りられ
○ナハなるまの家ふ ふもあ ところへてたてをきふる
○ハうつ命もすくらつきハ
○ヒ 柿 亟をすしむふ　　徒ようち木の柿
かやうに行南ふ安し　日ち 仮中さげさげりかなを
○マ かりのすこ　　仏ふさのを　　塩やきころも

一さしすせうノ仮名を唇と舌先を板歯へよせちい
さくふーらへて呼ぶハ赤徐よやゆ
一がぎぐげご
此濁音ハ鼻へ入仮名ゑ此濁音ゑとゐ字ハがハ鼻へひび
くをゑとゐぬるすとそれを鼻よりたつるやうよ唱へ
てハ文字平くゆ長いやしくやゆ鼻へ入字上下ハ低
名へゐゑゐねやうよ唱ふすへし
○おぐれ行　いさぢよき　えぐるーき
かげきよ　おぐりハ男よ

一かにぬねの　鼻へひぐく仮名也も上下ハかかの
れぬやうよ唱ふすへし
○な形よなれうーのくみやは秋よりのちハいろのん
○ぬ芭ぬいろはふきやのをのそかうろ
一ばびぶべぼ　此濁音をさけて走にまゑむめも唱す
いく強く唱へてハむいやし和に濁ゑし
○ば形さばり
○ば さびーき
○仏 悉皆成ぶつと
和に濁ゑへし
びと みとの名よ濁ゑへし
和ゑにかゑり和ゑにつムへし

○後 神よ歩くをえうぶなり　初てに引べし

○杜 かべでのをなの　べと　あとのるよるよべし

○老 晨浸せきがん　ぐと　もとのるシ呼べし　虫こうんとハ　イカヽ

一 あかさたなはまやらわ　より移るハわの字　あよ分て也

○ひつれん　かいち　さひり　さるひ　なハ縄名ハ

をてき木　たまりる　やハら　あるを

但いろは後のかく　わとをないをんとすれば口内發まて

空ふて又和るるまは　あよ分てとく　あとやうえ

ぬやうをとなべし

一 うくすつぬふむゆるう　より移るハわの字　あよ分て也

ゑハ性よ　わとやゆやうよべし

○ゆくハ　すハ　三川編む　くふハ　給ハ義

作ハ　くむハ　空ぬるハ　ある八

一 うくすつぬふむゆるう　より移る　あ乃字ハ　ほあと　の字よ

呼べし

草庵（サウアン）　釈阿（シヤクア）　素足（スアシ）　初鮎（ハツアユ）　皮膚合（ヒフアヒ）

草鞋（サウアイ）　曳網（ヒクアミ）　酢敢（スアヘ）　三足（ミツアシ）　不合口（フアヒクチ）

無安（ムアン）　湯浴（ユアミ）　春秋（ハルアキ）

南無阿弥（ナムアミ）　湯揚（ユアカリ）　古網（フルアミ）

意変 あといろんとすれば口内破まて宜ふく〳〵 但 あ

の抑音 ウワ 見よ意ふこうくすつぬふむゆるこウの

ひくきを依て也

二 いきしちにひみいりぬ より移る あ の字 やあ の字

学べし　あノ上の仮名よ変を入てうつくし

帷幄（イアク）　氣相（キアヒ）　思案（シアン）　待合（マチアヒ）　谷間（タニアヒ）

最愛（サイアイ）　氣扱（キアツカヒ）　仕合（シアハセ）　立上（タチアカリ）　似合敷（ニアハシキ）

日足（ヒアシ）　見合（ミアハセ）　入相（イリアヒ）

日當（ヒアタリ）　見顕（ミアラハス）　有明（アリアケ）

意変 あといろんとすれば口内破まて宜ふく悪〳〵 但 あ

の抑音 イヤ 見よ意ふ也いきしちにひみいりぬ ニイ

乃ひくき有依て也

但 塩飽（シアク）所ノ名 見ハたるくト唱

○ 俵兎（タトヒ）人　俵兎（タトヒ）霊　たとへト宜えぬやうなるべし

一 ゑけせてねへめえれゑ より移る い の仮名 ゑ を絵
ぬやうよ唱へ〜〜

青山（セエ） 冷人（レエ） 平地（ヘエ） 詠じて（エエ）

○元来 い より生ずる ゑ也ゑけせてねへめえれゑ の
引きき依て ゑ に絵ゑ〜也年竟 い の仮名ゐゐき故
なり変を入ていつやうよ唱へ〜〜

一 まうのかか

育王山（イワウサン） 祇王（キワウ） 四王天（シワウテン） 鬼王（フニワウ） 横道（ワウダウ）
有王（アリワウ） 王伯王母（ワウハクワウホ） 青黄（シヤウワウ） 横障（ワウシヤウ）

あふ（用） おう（空） まう（ウウ） 如此三河氏名

わ は う より生ずる音にて わ と うとすれば え う の
引きき方づと口内よりなする也然るに は う の字を然と
加ゆるはあ〜祢と わ をふ用よ唱へんとすれば自然と
う の引きゆゆゆ

フハ能登の仮名也如ク ふを毋字ヨリ重テ一音ヨリ呼ヨ
変なり但字毎ヨリ呼ヘキ所ニ

一ケ濁新濁古濁の変

ま濁ハ先ヲ重テヲ

五行（キヤウ） 同道（ダウ） 一木（ボク） 元来ノ濁音也ケ濁ト云

禁制（キンゼイ） 心中（シンヂウ） 王子（ワウジ） 元ハ元来ノ活字ヲ上ヨリノ
連続ヨ依テ濁ヲ新濁ト云

是ハ角合まさのこりぬるゆゑ濁新濁の名ヲ依記ス

一也ヘ ふ所ヨリ ふ の仮名変分実を入てりゆへ

日夜（ヨル） 他水（ようる）

今川（田）姿（出）ヨ金沢 そハ濁世のあんな

江戸（江）のけうよまるひ

たちつてと の仮名へ移る前の ふ乃字ヨ仕て

ケ子れやうにやのえぬやうヨ呼ヨ

名（水）ヨたちを私の

それヨつけても

なるようて

一（天）ち絶ヘて

出（内）く

て の仮名へ移る前の ちゝつて 吉ヨ付てツムルやうにやのえぬ

やうよいヨヘ

ひたちてん

こゝろてや

一訓の内 なにぬねの へゝ は ま行前は つ 乃仮名呑やうよ
やゝこしぬやうにいふ也——
○姑 いたゞかれ
板 乃まゝ
一 さ の仮名 は と紛れぬやうにいふべきなり
○さて
一 假 さゝふら
所々に矢き字故間へやう紛れ悪耳に立也
頭を そ と突少へやうて又初の所まそさら

と下に長々と示宜
一 い の仮名ゆうとやゝのやうなり 勿論ゆふ也いうと呼ぶ者
○いやさうよいぶよなり
一 初の不まて ー の仮名古よりて伝ぬやうにいふべし
○雄 村畝乃ー て
一 し の仮名 ひ とやゝこしぬやうにいふべきなり
○添 也 智恵明
一 ひ の仮名 し とやゝこしぬやうにいふべき変
○人 ひとち
七 秋の
むとり

ス　ひちりき

かやうの木は大きく軟濁を呼べて吉

一る　のかな　ろ　とやめえぬやうるよいへきす

○かるる　本屋　今き　やぶうもなし

ろ　ひハ　稀ようけ

一ぬ　の仮名を字やめえぬやうるよいへきす

○初ぬ　おもりぬ　まぬ夜

一ぬ　のかな　ろ　の字やめえぬやうにいへきす

○えぬいろは　ぬを　ぬき　細ぬ入

一む　の仮名　も　とやめえぬやうるよいへきす

○たむ　ふるひ　ふり

一くわ　の字　か　と分をぬやうるよいへきす

○くるう　くるん　くるい　くるく　くるい　等

くるハ　わ　のよる　く　を分二つを合せて一音らに刈先

きて物書の写よりくわ　く　の音仮を考へ

一者　の字　し　と分をぬやうるよいへきす

○者ん　者く　者川　等同

先も者ゆと　ー　の音仮を考へ

一ヲ　の示はため字

一流よ短くツムルもの又短くさ傷ハ必延ること能ハ
ひ有へ〳〵但毋字をぬくく呼へてハのひすくなり
延るやうにてまるてかまつあるへし筆ニハ記くし

二月光北ゆいて　けいくるう
江　寅客もちりく　さあて
卒　月日矛につ月毋　もうし
仏　速皆成佛と　ちい　ふうと
阿　新社ひとる　ざあてい
円　越てう南校　ゑてう
好　月下乃門　げえう　如此為て
ゆゆくし

一右き書ニ[たり]の三字きめてゆへ〳〵と有
是ハあおりちきやうすはあ〳〵ゆ[たり]の字あうさたを
の所よ記す如し[と]の仮名和うに呼へてハ浮上を
て必し唇ゆてゆ実を入てゆへ〳〵
芭　綿帳のもゝは　いと、字浮尤章下ゆ
円　花ハ公れかゆと知りと
円　そよかゝ風ゆ秋と云うすも
円　秋とてもかとう
地　あとのそハそひ引すも　此と字ゆ記かゆれを云ゆ
円　たゆ〳〵ちきゆを祝ごゆれ　ト双フ

楊柳観音ことごとくうれ
しとの本伝
すかはち善哭かさうとの那を
住生とうへしと那り
人やうやうんとよみしを
一きの仮名も淳かなり古円寺実を入てよへし
○王城のきとんを
とりつけちくるはきてなる
天王記別をかりなり

此花のようきてハ色かうる
いやし

あきの花みか
ぬふひなき
きんやうわのしきハ
おろかなへ人もかし
一古書ハ びめぶ の三字 べら 乃二字ハうはくしく 粗く
いへ〜こと　但花ハ長くぬやうにいへ〜
○びぶべノ三字ハはひふへかノ濁音の本ス花
○らっ字ハ あかさたな はまやらわの内なれ長かくぬやうにあて
唱へ〜 粗きハ却てはやうにぬへ〜

○めノ字ハ点けせてぬへめえれ点の点ありたれ前ノ記如く移ハし

一たちつてとらりるれろ　舌音也故ニ通スル支

○安伽陀薩王　きゃかッら　きゃッた　に帰ル

○雲林院　うンりんゐん　又雲林院村ハうぢぬむらト云

○善塗　せんど　せんろ　元もと将軍を但移而仮名ニ依て上のきゃう移るへし

一三川ちるのり

○雲林院　うンりンゐン　寺泉殿　ちンせンでン　分延山

一三川ちるのり

○楠千　ランせン　人間　さンけン　一川ハ拾角へし　ちンけン　人倫

一二川する吾字のり

○生者必滅　しゃうしゃメツ　日月　ニちゲツ　一川ハ拾角へし

一引字する字

蛇　ヒウ　ヒャウ　瀟湘の夜の雨

蓼　セウ　バウ　芭蕉泡沫

う　ノウ　コウ　ヒャウ　士農工商

上ヲ短クトヲ延ル　光ヲ文字送リニ入

右同

下一川ヲ延ル

邦　ホウ　郡の

一三川ちるのり

○楠千　ランせン　人間　さンけン　一川ハ拾角へし　ちンけン　人倫

一二川する吾字のり

○生者必滅　しゃうしゃメツ　日月　ニちゲツ　一川ハ拾角へし

一引字する字

蛇　ヒウ　ヒャウ　瀟湘の夜の雨

蓼　セウ　バウ　芭蕉泡沫

う　ノウ　コウ　ヒャウ　士農工商

ゆ 孝行もてつれ
ゆ 花ぞよてよまふ
を 翠帳紅閨
こ 高樓より月ながめて
て 極楽上人
と 東光坊が阿闍梨

・トヲ延ル心
トヲ延ル
上ヲ延テトヲ短ク
右同
上ヲ延ル心
中ヲ延ル

歌引音の定まる不ハ大槩スボム字ヲツメテ開クヲヲ伸ル
但拍子なる所のみ也拍子のなき不ハ拍合
のほひ是ゆへ開合ハ也短文字遣りまかく為なり

一一字濁ての日仮名甚耳よりく所多

ま 分まはたいまい
め かぐやく
み うらうだ
源 むらさきはきよ

一同能名言るよ
う 実ハ名もさいりは
ひ 茅刈かのこまて絵
虫 秋の野乃
西 ちくたのめ

を ちやくまく
江 大くはよ多摩ろくよく
ゆ うすうすむ
井 月も仏やすあをそ
芭 何が縁よりかく所
枕 病ふとありけくつうさるハ
仏 仏はおとやしそ拍子ハ
竹 正く年八しそつくと

板 ちんこもろの　　後 者伝物をつくりて
去 はしてハ死してへ

一同根名ハ事

タ みしもやしもちろの
牧 むものまへとやしへ　めちろちんれいど
井 たのむ仏乃ちるれいこと
芭 云の葉くさの海りれうち
地 森れ本の名乃名たくまかけ手ゆなる本れ下乃
くろ木乃名乃ハ二種に

アリ ちける本れ花のうち乃名又秋れせみの吹乃声
日 弥の名乃へ　みれ祂
絵 ちひとつふことをうみ　みとふこもあれあひ形
ら は　通 舎弟の能登乃名
車 ものもすしきや
たの如く日ハ如ハ不たけ手ゆ　ぬやうよ公ハ

一也ハて　てふをは　の仮名をいひすてゝ　ゝ字の字頭へ
ふく永付故文字双ひ強ちうく成或ハ　てふをは　の
仮名れ下の章も必さゞれ一名中よいひたぐく

てにをは の仮名を兼ねたるにあさぬんをせはさしすの字
字ハそのごとく極るべし　さ字ハ祈　てふをは ハ用あり
てふをは ハ助語(チョゴ)まて三字をたすべなれと勿論音曲
よと共に以て三字ハ陽てふをは陽也陰陽和合
なるすハ視よまし

一或説の書に曰　を 式のうりハ極く　に 式のうりハ三ト云
是大成僻説ハ是なりと云へし　歌書まて八極き を
まき に と書るべたとへおけ 桶 小 桶 こと事
かゆることを覚へよりて仮名を書かゆる事を

あまたも仮名を依て唱へかゆる事 いをえ の仮名
よはなの類事なり且亦視八所の上ケトケを依て
式を もおなく唱へ式 れ をかなく説ふるハ勿論拍
よよむられ上下ケうりよひられて也依上字依下
字とゆるを知るにすハ乃にまるよ也

右用合音便を訓(ヨミ)者ともに五十字門也
仮名とくのうをり形親疎を弱徐
熟得して又入聲(イリホガ)に為事を避(サリ)へし

古ゑの奥山よりあくがれ出て侍りける

ふる紅葉みちもなきを見まゝや

中くよりちかくあるよりあり

ひのまより深山乃おくを尋ぬる